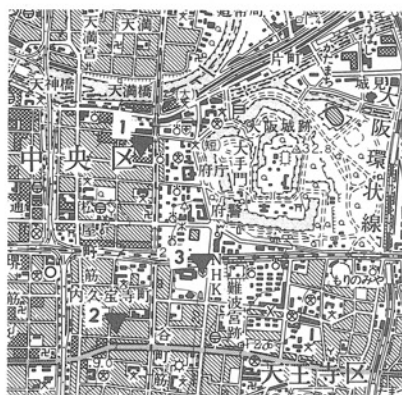


大阪・大坂城跡 おさかじょう



(大阪東北部)

1 所在地 一 大阪市中心区船越町一丁目、二 同区安堂寺町二丁目、三 同区法円坂二丁目

2 調査期間 一 OS九九一四八次調査 一九九九年(平11) 一〇月～十二月、二 OS九九一五九次調査 一九九九年二月、三 NW九九一三三三調査 二〇〇〇年二月～四月

3 発掘機関 (財)大阪文化財協会

4 調査担当者 一・三 黒田慶一、二 辻 美紀

5 遺跡の種類 近世城郭跡・城下町跡

6 遺跡の年代 室町時代
～江戸時代

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

大坂城は天正一一年(一五八三)の豊臣秀吉による築城に始まり、秀吉晩年、慶長三年(一五九八)の「大坂町中屋敷替え」によ

って大改造を加えられ(この時期を境に、豊臣前期・後期の二期に分けている)、その後大坂夏の陣(慶長二〇年(一六四五))でひとまず烏有に帰す。徳川幕府は二の丸の堀(現在の外堀)外を市街地として開放したので、今回報告する三地点はいずれも江戸時代には城下町内に位置する。また下層には難波宮・京跡、石山本願寺跡などの遺跡が存在する。

一 OS九九一四八次調査

調査地は谷町筋から西に一四〇m入った船越町と呼ぶ両側町の北側の町並で、豊臣時代には惣構に位置するとともに、飛鳥時代から平安時代前期の遺構が濃密に分布するところである。

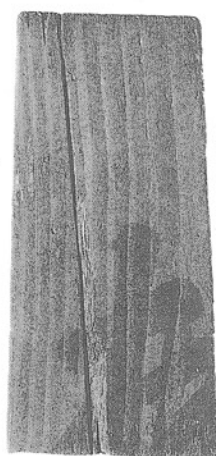
木簡は二基の土坑SK一〇二・一〇三からの出土で、いずれも江戸時代前期の整地層上面からの掘込みである。この二基は敷地境の南北塀の西側、塀からわずかに〇・四〇・八m控えた位置に、長辺を塀に平行させて、一・八mの間隔をあけて南北に掘られており(SK一〇二が北側)、有機物と陶磁器片を多く含むことから、ゴミ穴と考えられる。

SK一〇二は、長さ一・五m以上幅一・〇m深さ一・一mで、青花皿・伊万里焼碗などの陶磁器、長さ二〇cmの亀甲文の絵柄をもつ羽子板などとともに、木簡は出土した。一八世紀前葉の土坑と考えられる。

SK一〇三は、長さ一・七m幅一・一m深さ一・一mで、底部外



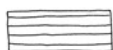
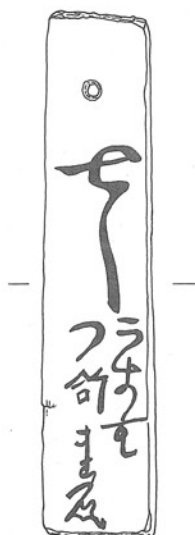
二(1)



一(3)



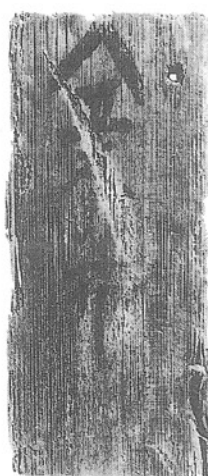
一(1)



三(1)



三(1)



一(2)

(2)は、法華八講関係の木簡である。左側上下二カ所に釘孔と思われる小孔がある。「長浜^{〔屋又カ〕}□□右衛門」は文献史料に多出する長浜屋又右衛門（塩村耕編『古版大阪案内記集成』（重要古典籍叢刊第一巻）和泉書院、一九九九年）の可能性が高い。長浜屋又右衛門は延宝九年（一六八二）に、越前嶋（縞）を扱う布問屋として名が見える。近江町は江戸時代から明治五年にかけて見られる町名で、『宝暦町鑑』（宝暦年間（一七五一―一六四））には「高麗橋東詰一筋南の丁、骨屋町筋より西」とあるから、船越町の一筋北側の通りで、やや西方の現釣鐘町二丁目にあたり、当地からは至近距離であるが、同一地ではない。

(3)は、割れてバチ形を呈する木片で「布」と大書している。看板の破片と考えられる。(2)木簡の共伴は、文献史料が長浜屋又右衛門を布問屋と伝えるだけに興味深い。江戸時代中期の大坂城下町での宗教事情を、特定の人物で語ることのできる、極めて貴重な発見である。

OS九九—五九次調査

(1)

□
□^(キラクバイバ)
□^(キラクバイバ)
□^(キラクバイバ)
□^(キラクバイバ)

「ウ」

(146) $\times 24 \times 3$ 051

(1)は、上端はゆるい山形を呈し、下に向かうにつれ徐々に狭くな

るが、下端は欠失している。表とした面の二丁目以下は、*ka* = キ
ra = ラク、*va* = バイ、*bha* = バと判読できる。反対面に記された
一字は *hū* = ウンと読めそうである。これらの種子が何を意味す
るのかは不明である。なお、梵字の釈読については、千手寺の木下
密運氏のご教示を得た。

三 NW九九—三三調査

(1)

「
○七
〔月〕□
□□〔こすか〕
□□
□□
□□
□□

103×22×8 011

(1)は、荷札木簡と思われるが、墨痕が薄く判読困難である。上端近くに小孔をもつ。左行一番下の墨書は花押の可能性がある。

(一・三 黒田慶二、二辻美紀)